内郷村報

毎月一回一日發行

定價	一部	二十錢	
年分	一ヶ年	四十錢	
金二圓	共拾錢		

編輯兼印刷人　内郷村報社
發行所　同所
印刷所　福島縣石城郡平町一丁目二九番地　振替貯金口座仙臺二〇〇〇番
本社活版所　株式會社

政黨への爪牙

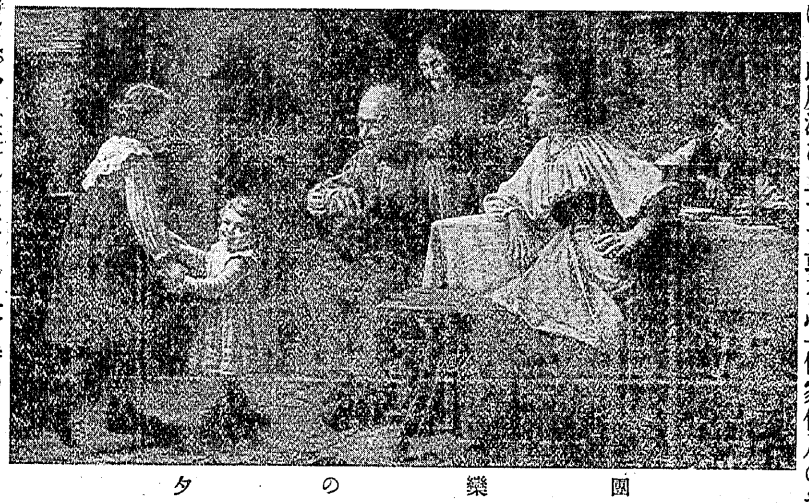
惡二千石

大内民惠

政民兩黨其何れかが政權を握れば、野黨系の地方長官は全部之を罷免し、與黨系のルンペンを以て之に代へ、以下之に準ずで、其陣容を改めるといふ事が常例となつて仕舞つた。而して長官其者の標榜する處の施政方針や聲明宣傳は、至極結構なもののみではあるが、實際は黨勢擴張たゝ之れあるのみで、事ある毎に、機會ある毎に、其方針に向つて、巧妙に將た露骨に蠢動して居るのである。殊に選擧の際などは、與黨野黨によつて、取締上に寛嚴

一樣の使ひ分けをなし、與黨議員を多く出したる者が殊勲者といふ事になり、所謂立身出世もするといふ狀態である。而して一方ルンペン連はどうかといふに、政友ならば月曜會、民政ならば三日會と稱し、何れも東京附近に巣をくつて居つて、明け暮れ我黨內閣の出現を祈願し、選擧の際などは、選擧監視とやら稱して、地方に出馬し、奮戰之れ努むるの忠勤をいたし、只管時機の到來を待つといふ有樣である。いざ我黨內閣出現となると、それこそ血眼になつて、自薦他薦あらゆる方策を講じ、中心勢力に向つて、猛烈なる

獵官運動を開始し、訪問は勿論圓タクを驅つて御大の後をつけ廻はし、御大は之をまかうと苦心するこゝに活動映畫よろしくといふ場面展開の醜態が演ぜられるのである。かくて愈々任官確定となると、そうした事などはおくびにも出さず、堂々と地方に乘り込み、大に長官振りを發揮するのである。其歡迎やお祭りの如くであり、之に反して首をきられた新ルンペンの出發見送りはお葬式の如くである。東京のさる新聞は、此度浮び上つた或不心得者が、赴任したならば大に黨勢を擴張するんだなどと、力咏返つたといふ訪問記をのせて居るが、危險千萬な事である。それから長官以下の入れ代へにも、國



國樂の夕

を擧げてかうした悲喜劇が演ぜられる事は勿論なのである。まことに苦々しき次第である。殊に滑稽なのは浮び上つた此等ルンペンの細君連である。昨日までは借家住居のやりくり女房が今日からは何々婦人會支部長とやらに出世して、地方婦人事業の中心となり、下僚の細君連や虚榮心のつつぱつた地方婦人連から、長官令夫人として、取りまかれ、崇め奉られるのである從つて此等令夫人達の御事業たるや推して知るべしである。こゝに於て最も憐れなるものは、水平線以下の下僚連である

時の天下に從ふべしで、相當な手腕力量識見等があつても、之を發揮する事が出來ず、政民何れが代つても、唯々諾々維れ命維れ從ふで一種のロボットたらざるを得ないのである。殊に馬鹿々々しい目にあつて居るのは、忠良なる臣民、善良なる

地民方である。かうしたルンペン氣分の長官やロボット式下僚等によつて地方行政を支配される限り向上も發展もあつたものでなく、虎狼にも比すべき、二重力の立廻り渦中に、彷徨せざるを得ざる有樣なのである。之を要するに地方長官は、政黨の走狗にして爪牙である。走狗や爪牙の支配下にあらざるを得ざる國民地方民は實に不幸である。今日の地方長官は決して良二千石ではない、記者は之に代ふるに

惡二千石と命名する。日本の政治が斯くの如き弊風を馴致したる原因は、

（以下二面へ）

謹賀新年

昭和七年一月一日

大内民惠
大内きみ
大内たき
大内一郎
大内二郎
お元日
三度の式や
朝からの
（民惠）
卷幡　胖
卷幡みつ
甲斐根丑太郎

内郷村報の六大使命

一、政黨政派を超越して、村力充實主義を標榜す。

二、村内公私各機關の活動狀況を報道し、併せて其協調を計り、總親和總努力の實現を期す。

三、本村共濟事業の徹底を期す。

四、村内の善事美行を表彰し、且之を奬勵す。

五、本村と本村出身者及本村關係者との聯絡を計り、且其發展向上を期す。

六、尙餘力を以て、國民善導に當る。

本紙發行は大内一派の事業にして、其の社說は子孫に對する遺言を兼ぬるものなり。

第十八號

父母が極北の寒い樺太に、元氣を出して働いて居るのも、お

に堅き決心がついた事と思ふ。其決心を如何なる場合にも變へぬ事に賴むで置く。

といふ是には小隊長も君の勇戰に感激せられ思はず涙を催したなど由に御座候尙此客せらるゝに及んでも亦自己の所持せる彈丸を一々戰友に手渡され又云ふには「君分隊長殿と最後迄戰鬪し得ないのが何より殘念だ何卒分隊長殿に宜しく申して呉れ」と沈着にして尙も戰鬪を繼續せんとする意氣實に稀に見る勇士御座候云々（後略）

右は嚴父山野邊秀吉氏に寄せられたるの一節である　記者

高木　撮影

吟社同人星甫君入營に付舊臘十二日修二庵に送別句會を開催右の諸子出席寒月冬木二題で詠句し尙送別句を短冊に認めて贈呈した。

（一面よりつゞく）

云ふ迄もなく政黨政治の害毒である。國民は覺醒一番之か一掃に奮起すべき秋であると思はれる。我等は又こゝに復活した四十名近くの長宮諸君にも、首になつた同數の諸君にも、此際大に考へてもらひたいと思ふ政黨の走狗や爪牙となつて働く事が何の名譽だ、諸君が志す今日の國務大臣の如きは、眞の國士は之に齒ひするを恥とするのである。廟名を竹帛に垂るゝなどと思つたら大變な間違ひだ。具眼の歴史家は現代の政黨政治や政治家を何と批判するか。常識ある者は大抵相像がつく事と思ふ。諸君の多數は國家の恩給をうけて居るだらう、それを以て質素に生き、我國刻下の難局打開の爲に、意義ある奉仕によつて、報國の至誠を致す事に宗旨代へをしてはどうか

勅願曉鶏聲　勞務　樋口平久上

そのかみの高天の原のためしにも
八百鶏かれに夜をあけにける

年頭に際し、かゝる苦言を公表する事はどうかと思ふが、一年の計は元旦にあるが故に、憂國の至情から敢て此言をなすものである。虚心坦懐大に反省せん事を希望する。

（本紙は特に新舊長官更新舊大官等に贈呈する事にした）

宮方面共濟會

米二十九俵　金九拾圓

宮方面の會員募集は、地域の廣大なると、他に差障りなき休日を得る事が困難なりし爲に、遷延して居つたのであるが、愈々十二月十三日竹内役員倶樂部に、委員會を開催して諸般の打合せをなし、十五日早朝を期して、運動を開始したるに、僅か三時間にして、一千三百名の會員、白米二十九俵五升、金九拾壹圓九錢の會費を得た。七十名の委員五十余名の青年會員が、寒風を突いての奮闘は、實に目醒しきものであつた。其氏名は左の通である。

委員　伊藤長助　五十嵐玉子　泉已三郎　井砂興平　海老名寅藏　初田千丈　長谷川運太郎　芳賀光榮　星秋吉　本田繁三　本間明治　富森一繁　布山興四郎　大森德之助　折笠サト子　小野寺チヨノ　藁谷才之助　吉村清吉　高橋善八　高萩直枝　高木忠吉　武田末松　反保忠右工門　丹治芳兵術　圓谷清　内藤春吉　中村彌平治　長沼平三郎　南波宏子　武藤義造　梅森信　牛久恒　草野興平　草野利久　國井順之助　國井作治　山崎金興　山口馬太郎　八卷良雄　松浦勝彌　松沼六郎　正木千代藏　増澤武　松崎ハル子　藤田誠　國分周三郎　新谷彦資　小谷畑仁左工門　會川多三郎　阿部岩次郎　安藤タカ子　佐藤一松　佐川コノ子　佐川末吉　佐藤作藏　佐藤七太郎　佐藤勇助　齋藤千代子　齊藤喜市　水野谷三郎　綠川勇一　志賀定次郎　志賀留治　志賀ハルエ　澁澤鶴松　清野喜右工門　鈴木寅清　鈴木金五郎　鈴木文平　鈴木興助　須藤德之亟　同榮之助　理事　藁谷豊之助　田中義枝　宮下秀貞　横山清美　青年會員　森下寅一　菊地茂利　所幸吉　佐々木政四郎　高橋次　櫻井正一　水田吉太郎　仁田邊長松　齊藤弘　三上義夫　道山辰之助　高野市三　名城安惠　小野松造　小島春龜　平澤實　西田源佑　渡邊富喜　内海安治　岡芳太郎　寺崎喜久次　阿部正利　中村善松　山内義則　丹治晃　谷田部裕利　太田善一　佐竹眞　森昌雄　管野寅喜　管野勇夫　田中富五郎　橋場勇　佐藤彌平　熊田清次　佐伯一男　鈴木末松　須田政吉　舟木始　渡邊芳雄　菊地政夫　遠藤武雄　鈴木春義　志賀秀雄　鈴木清　大森庄七　瀧口三義近藤豊次　齊藤大勝　鈴木茂吉　菅野倉吉　小豆畑寒晴　齋藤菊夫木村爲夫　管野作次郎　眞壁興三郎　佐藤林次　渡邊健次　杉本忠市　田中力　中野齊吉　高橋喜三郎　武藤定夫　星野一二　贊助員　山崎辰亥　志賀留吉　副會長　大内民惠

（六面寫眞參照）

共濟會の餅米配給

既報の通り、内郷村共濟會にては、理事、委員總動員で、全村に渉つて困窮者を調査し、舊臘二十六日村役場に於て、野木會長大内副會長並に本部理事出席して、詮考會を開き、五十九世帯、二百三十五人の家族に對して、二石六斗二升の餅米を配給する事に決定し翌二十七日それ〴〵方面委員の手によつて之を實行した。

特志寄附

五十嵐一也氏は金五圓を小野寺チヨノ女史は金參圓を又渡邊幾一氏は息女の結婚費を節して金五圓を何れも内郷共濟會に寄附し其特志を感謝されて居る。

金坂火防

組は一昨年五月發會以來大友組頭佐藤副組頭をはしめ全組員努力の結果防火設備全く成り舊臘六日磐炭永久保副部長會田院長等臨場新購入ホース三百尺の放水試驗をなしたるに頗る好成績なりし由。

本紙賛助金寄贈芳名

金五圓　竹内　五十嵐一也
金五圓　綴　渡邊幾一
金貳圓　宮澤　志賀直治
金貳圓　同　井砂興平
金壹圓半　御殿　遠藤米吉
金貳圓　金坂　志賀清
金拾圓　内郷　内郷教員會
金拾圓　内郷　某氏
金五圓　朝鮮　中野新平
金參　田村　大方遠也

スポーツ

ポーツ熱の勃興と共に、一時會社内外に於ける一般の興論を捲き起した、磐城炭礦体育會組織の問題も、その後、一般的表面にこそ現はれなかつたが、輝やかしい、このたびの野球や陸上競技等の優勝に益々底力を得て、よりよりその具体的原案作成に東奔西走したとか……

★

その概形がこの程漸やく整つたので、此處を先途と、濱崎、小島の兩氏先鋒となり慎重、その實行策を考慮中なれば、まのあたり我が磐城炭礦にも、立派な体育會の誕生が見られ、皆んなでそれを祝福する日の遠からず訪れることを信じます。

★

陸　上競技部納會。多大な收獲の下に、豊明的な新生を拓いた我が陸上競技部は、去る十三日の公休を利用して午後一時より、本年の意義ある納會を金坂グランドに擧行。

恒例により選手一同の紅白仕合あり。この日、一入肌を縮める寒さではあつたが、本年最後の努力を印すべく、選手連、何れも昇天の意氣あり。

背後に立つ熱心なる後援者の聲に、白熱的な接戰を演じて仕合は進行す。滿身の努力を傾注しての一進一退に、好記錄續出。遂に最後に於けるリレーが勝敗の分岐点となり、紅軍折角の奮戰も空しく白軍に勝鬨あがつて終了。

それより直ちに、グランドハウスに於て茶話會を催す。各自、過ぎにし一ヶ年の足跡を顧みて、無量の感慨一瞬……獨得の講評、例の隠藝に花を咲かし午後五時有意義に閉會　（千葉生）

（昭和五年八月十五日郵便物認可第三種郵便）

矢野恒太序　大内民惠著
服部宇之吉
教育制度改革概論
（四六版二一一頁　定價五十錢　郵税六錢）

我國教育學界の權威
京大教授小西重直博士
行き詰れる現代の教育制度を解體して、學理と實際と、歴史と實驗とから新に大内案九主義を提唱す。天下知名の士の賛同枚擧に遑あらず。されど未だ一人の抗議者も現はれず。
書を寄せて曰く　多年ノ御體驗ト實地ノ御試練ニ基ク眞摯憂國ノ大精神ヲ拜味仕リ不思感激ニ打タレ申候云々。

發行所　日本評論社　東京牧ノ内昭和ビル
取次所　内郷村報社

勞資の楔子　名譽の社宅世話役

新任式と披露宴

小波先生の大講演會

十二月二十二日昭和館に

教育訓練要項

本村各學校に於ては、時局に鑑み、兒童生徒の教育が向ふ十ヶ年間毎年九月十八日を期し、一人一錢づつを醵出し、一朝國家有事の場合に國防費として献金す

内郷村社會事業史

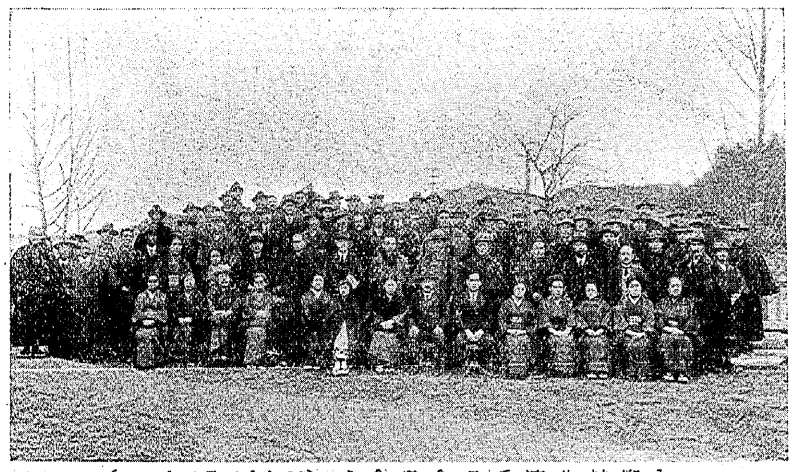
自大正十二年
至昭和六年

大内民惠述

一、緒言

こゝに本村社會事業史の大要を述べて見やうと思ふ自分が關係ある事業を自分が書くといふ段になると、之は自畫自讃だ、自己宣傳だなどといふ誤解を招ぐかも知らぬが、余はかうした事業によつて、名譽を得やうとか、表彰をうけやうとかなどゝいふ子供らしい考もなく、又そうまで墮落もして居ないのである。たゝ社會事業は世界を通じて、また其發達中の道程にあるものなれば、それに對して資料を提供する事は、斯界に忠實なる所以であり、且つは之は公表する事は、余が責任であると信ずるが故に敢て此擧に出つるものである。神ならぬ身の仕事なれば、誤謬もあらうし、逸したる資料もある事だろうと思ふ。余は過つて改むるに敢て躊躇するものでなく又人言を容るゝに決して吝かなるものではない。幸に我讀者諸君は、余が微衷を諒として、忌憚なき訂正と遠慮なき補修の勞を垂れられん事を豫めお願して置く

本村は常磐炭田に於ける最大なる磐城炭礦の所在地であつて、其戸口は優に平町を凌ぎ、若松市に次ぐ縣下の大村ではあるが、明治時代は勿論、大正時代に入つても、當然なかるべからざる社會事業と目する何物もなかつたのである。之を見た余は、既に人生の過半をすごし、どうがな生活の基礎は出來た、此上はかゝる處女地に居をトして社會事業と、教育研究とに個人として何等求むる處なく奉仕し沒頭して見たいといふ一念が發起したので、大正十二年初頭、同志渡部孝一安田信吉兩氏の聲援を得て瓢然當村に來つて、炭礦勞働に從事せしめ、修養させ貯蓄させて、五六百圓の資金を得た處で結婚せしめ、之を海外か我殖民地に移住させて獨立せしむるか、或は内地に於て然るべき自活の道を得させ樣、それには約七ヶ年を要する豫想であつたので、之こ七年



内郷村共濟委員會發會式（五年十二月二十一日）

二、七年會

創立を企つたのである。其目的とする處は、農村の青年殊に相續人ならざる二男三男やを募集し、之を一ヶ所に收容して、會と命名し其附帶事業としては、一般獨身勞働者、農村の期節出稼人をも收容して、其向上と便宜とを計り兼ねて圖書の無料貸出しや全山勞働者の善導をもして見たいといふ目論見を立てゝ當村の磐城炭礦重役並に幹部に交渉し、かうした事業は國家社會の爲でもあり、會社の利益でもある事を說き、お望みならば余自身其任に當らんと申し出てたのであつた。當局は幸に之を嘉納し直ちに寮舍三棟三十室を新築して提供してくれる事になつた。余は之に力を得て、指導補助員四人を任用帶同して、忘れもせぬ余が誕生日たる同年四月二十九日、全く一家を擧げて移住し中央並に縣下知名の有力家の贊助を得て、趣意書五千冊を印刷して、九州北海道を除く、各府縣下の町村役場青年團等に郵送して會員の募集を開始したのである。余

内郷村共濟委員會發會式（一月二十五日）

（以下四面へつづく）

（三面よりつづく）

を以て云はすれば、兎にも角にも之が本村社會事業と稱するものゝ嚆矢であると信ずるものである。かくて

（欄外よりつづく）

か半年にして一千五百余圓を投じて、尙前途は暗澹たるものであつた。されど會

會は門前市をなすと思ひきや世間では之れは炭礦で稼人を集むる手段であり、宣傳であると稱して、來るものは僅か十數人に過ぎずして却つて今日の所謂東京邊のルンペン連が十數人押し掛け來りたるを以て、農村青年は、恐れをなして漸次退會するといふ狀態となり一面地元に於て、余の眞意を解せざる當時の下級役員坑夫組長、募集員飯場頭等中には之を天下り合宿の出現と稱し、會長は洋行歸りの大山師で、會社や勞働者をくひ物にする者だなどといつて、事毎に迫害を加へるといふ有樣であつて、僅

（以下四面へつづく）

何等の經驗も持たなかつたので來るものは拒まず、去るものは追はず、何れも紳士とし

つては喜びの一つである。次に本會創立以來、人事相談職業紹介無料宿泊食料給與、免囚起訴猶豫者病弱者

内二百六十五名の爲に、實に三千三百九十五圓六十七錢を奉仕した事になつた。

業であつたが、之れが愈々公共の機關と合流する機運に達したのは實に

（三面よりつゞく）

を以て云はすれば、兎にも角にも之が本村社會事業と稱するものゝ嚆矢であると信ずるものである。かくて

（欄外よりつゞく）

か半年にして一千五百余圓を投じて、尚前途は暗澹たるものであつた。されど會社幹部の倉田亀吉氷室清青沼鋒太郎杉山止濱崎善三郎高濱保の諸氏はよく余が心事を了解し之に同情して、會を會社直轄の合宿として種々の便宜を計り補助金をも交附する事にしてくれたので、復活の曙光を見、連綿今日に到り、常に三十人乃至百五十人の會員を收容して、素志貫徹に努力し來たのである。されど余が德と力との足らざるが爲に、創立當時の主要目的たる海外移住殖民地開拓等の計劃は見事失敗に歸して仕舞つたのであるが、勞働者の待遇即ち合宿飯場請負業者等に於ける食事寢具賃銀支拂計算物品供給等の改善の上に聊かの貢献をなしたる事丈は事實であると思はれる。されど余が一家はもとより勞働者取扱には何等の經驗も持たなかつたので來るものは拒まず、去るものは追はず、何れも紳士として之を遇し、云ふがまゝに金も貸し、着物も着せてやり、食費も免じてやつて、そうして之を善導しやうとしたのであるが、之も大なる失敗であつた。大正十二年五月

御殿方面（二月二十二日）

金坂方面（三月五日）

より、昭和四年十二月末日迄に、本會に出入したる延人員は千五百余人に達し、内二百六十五名の爲に、實に三千三百九十五圓六十七錢を奉仕した事になつた。

此犧牲に驚き其指導方針を改め、徹底的に會員の素質を調査し、病弱者以外働かざる者には絶對に金品を貸與せざる方針をとりたるに昭和五年には三十九名に對し、四百九十九圓五錢、昭和六年は僅かに九名、六十二圓四十三錢の奉仕で相濟んだ次第で目下四十人の會員を有して居るが、一人の病弱者を除くの外、何れも堅實に精勵し、貯蓄を心掛けて、將來の向上を期して居る事は、余の欣幸とする處であり、又本會出身者にして、全山に家庭を作りたるもの數十を算し、常に音問を絶たざる事も、余にとつては喜びの一つである。

次に本會創立以來、人事相談職業紹介無料宿泊食料給與、免囚起訴猶豫者病弱者兒童の保護、救民救濟生活改善等取扱ひたる件數は少くも五百余件に達して居ると思はれる。又二ヶ年余各炭礦應援の下に常磐礦報つるはしと稱する旬刊新聞を發行して、各炭礦の連絡協調勞働者の善導等を計つた事もあつた。而して本會の創立以來多大の援助を與へられたる磐城炭礦、殊には前掲の諸氏及現幹部淺野總一郎前川益以菅原萬治郎の諸氏並に終始一貫本會の幹部として劃策奮鬪の至誠を致してくれた故卷藤常六氏等は、獨り本會のみならず、本村社會事業の功勞者として、其史上に特筆すべきものであると思はれる。

以上は之れたゞ余一個人を中心としたる本村社會事業であつたが、之れが愈々公共の機關と合流する機運に達したのは實に

三、昭和三年

であつた。此年四月二十八日即ち余が誕生日の前日現

高坂方面（三月十五日）

（三面へつゞく）

諒として、忌憚なき訂正と遠慮なき補修の勞を垂れられん事を豫めお願して置く

時代に多詰つても、當然なかるべからざる社會事業と目する何物もなかつたのである。之を會は門前市をなすと思ひきや世間では之れは炭礦で稼人を集むる手段であり、宣傳であると稱して、來るものは僅か十數人に過ぎずして却つて今日の所謂東京邊のルンペン連が十數人押し掛け來りたるを以て、農村青年は、恐れをなして漸次退會するといふ狀態となり

一面地元に於て、余の眞意を解せざる當時の下級役員坑夫組長、募集員飯場頭等中には之を天下り合宿の出現と稱し、會長は洋行歸り

圓の資金を得た處で紹介せしめ、之を海外か我殖民地に移住させて獨立せしむるか、或は內地に於て然るべく各府縣下の町村役場青年團等に郵送して會員の募集を開始したのである。余

村の其他出稼人を收容して、其向上と便宜とを計り兼ねて圖書の無料貸出しや全山勞働者の善導をもして

の大山師で、會社や勞働者をくひ物にする者だなどといつて、事毎に迫害を加へるといふ有樣であつて、僅

（以下四面へつゞく）

（四面よりつづく）

が出來たのであつた。縣村より補助がある譯でもなく又一般が社會事業に諒解なく、之れが助成會をつくらうとしても、耳を傾くる者もないといふ狀態であり、

御臺境小島御厩方面（五月二十二日）

廢して五圓を寄附されたので、合計六十五圓を得た。之が抑々本村社會事業當初の資金であつたのである。而して同年度に於て、生活費補助十八圓六十八錢、救療費十圓、旅費三圓三十五錢、計三十二圓三錢を支出し、三十二圓九十七錢を次年度に繰越したのである。但し之れ以外に四家氏も出資された事と思ふが、余も亦少くも四十余圓を支出した樣に思はれる。而して余は五十二件を取扱つて居る。

綴坑方面（六月一日）

五、昭和五年

費一圓四十八錢、計二十圓八錢で、差引十二圓八十九錢を繰越した。但前年と同じく、余は三十余圓を支出し、四十八件を取扱つて居る。

白米給與五圓四十五錢、備品費一圓五十錢、消耗費一圓八十錢、印刷費一圓九拾錢、雜費六圓三十錢、計五十五圓十六錢を支出し、差引二十二圓二十七錢の不足を生じたのであるが、次年度に資金の調達の見込が立ち、又際限なき出資は余の財政の堪へざる處なるを以て、之を立替金として、處理したのである。

而して以上三年四年の業蹟に鑑み、到底我々兩人の力を以てしては、相當の成績を擧ぐる事能はざる事を知りたるを以て愈々助成會の如きものをつくる事を決心し、之を四家氏にはかりたるに、氏亦之に共鳴、野木村長も亦贊同したるを以て、それには社會社業の性質を一般に知らするに如かずと考へ、此年七月二十五日を期し、全く私資を以て月刊內鄕村報を創刊した。其聲明したる六大使命中に本村共濟事業の徹底を期すの一項を加へて、極力其宣傳に努め、八月二十八日に

內町上下綴方面（七月五日）

は、村會閉會其議席を借りて、我等兩人は村議諸氏に對し、助成會即ち共濟會規定の原案を示し、一戶一ヶ年白米一升以上を會費とし

（以下欄外へつづく）

（五面よりつづく）

全村氏を擧げて、會員とする方針を立て、其設立の必要を說きたるに、滿場一致を以て之を贊し、原案の修正をなし、全員贊助員として助力する事を聲明されたるを以て、大に力を得、九月二十日再び村會に於て、修正したる會則を協議決定し、會則に基き野木村長は會長に、我等兩人は副會長に就任し、金澤助役は理事長、齋藤收入役田口書記は本部理事となり、十月三十日附を以て、全村に涉つて百五十六名の委員を囑託し村議全部磐炭上級役員醫師巡査部長名士等五十名を贊助員に推薦し、十二月二十一日村會議事堂に於て、照沼縣社會事業主事補臨席の下に、其發會式を擧行し、茲に全く本村社會事業の陣

（以下六面へつづく）

從つて活動資金調達の途もなかつたので、先づ取敢へず、野木氏十圓四家氏三十圓余は二十圓を醵出し、それに蓬田光匡氏死亡に付、未亡人松枝氏が香典返しをつて居る。

四、昭和四年

本年度に於ては、更に收入なく、繰越金より支出したるものは、生活補助七圓六十錢、救療費十一圓、旅費一圓四十五錢、學費二圓一錢、

本年度の收入は、年末に到つて、全村各學校職員一同より二十圓の寄附があり生活補助一圓五十錢、救療費三十三圓二十錢、旅費一圓五十錢、學費一錢、

（欄外よりつづく）

容は整ふたのである。而して余は本年度に於て、五十八件を取扱つて居る。

年末餅米給與　六五、五〇
備品費　二二、五八
消耗費　二、七四
印刷費　一〇二、二七
旅費　三三、四一

より、二石六斗二升の餅米の配給が出來た事であつたしかも一切の仕事が、普遍熱涙滂沱として、原稿紙を濕ふすに至つた。

終りに特記するが、公化

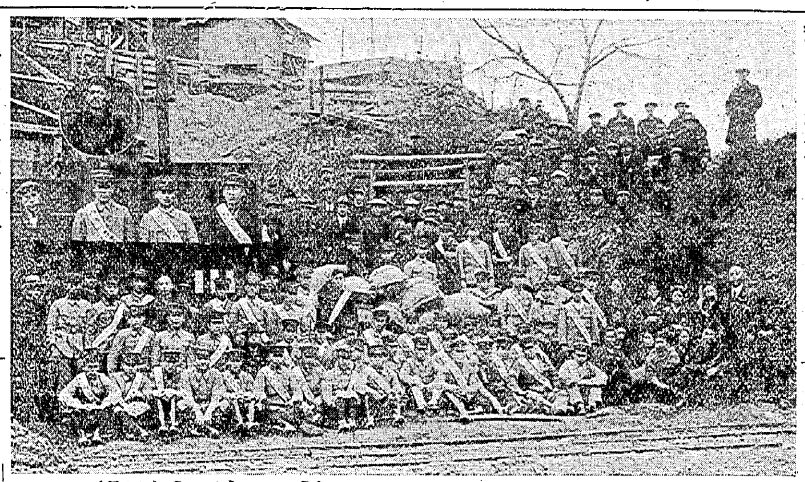
（五面より〈づく〉）

全村氏を擧げて、會員とする方針を立て、其設立の必要を說きたるに、滿場一致を以て之を贊し、原案の修正をなし、全員贊助員として助力する事を聲明されたるを以て、大に力を得、九月二十日再び村會に於て、修正したる會則を協議決定し、會則に基き野木村長は會長に、我等兩人は副會長に就任し、金澤助役は理事長、齋藤收入役田口書記は本部理事となり、十月三十日附を以て、全村に涉つて百五十六名の委員を囑託し村議全部磐炭上級役員醫師巡査部長名土等五十名を贊助員に推薦し、十二月二十日より、二石六斗二升の餅米の配給が出來た事であつたしかも一切の仕事が、普遍的徹底的に行はれ、社會事業の眞精神を發揮し得た事は、全村を擧げて此事業の精神を理解したる、美しき熱涙滂沱として、原稿紙を濕ふすに至つた。

終りに特記するが、公化したる我本村社會事業の元祖にして、共濟會の產婆役をつとめたる四家氏は、四月十五日家事の都合により縣共濟委員と副會長とを辭任せられたるは、斯業發達上尠なからざる損失であると痛感すると共に、氏の勳勞に對して深甚なる敬意を表するものである。かくて前村長菅波忠治氏、後任として就任したので、其老練敏腕なる活動を一般から期待されて居る。

共濟會員　三千六百二十名
同　委員　二百六十三名
同贊助員　五十名
同　理事　三十一名

（二十九日午前五時稿了）



（十二月十五日）

（欄外よりつづく）

容は整ふたのである。而して余は本年度に於て、五十八件を取扱つて居る。

六、昭和六年

本年劈頭に於て、委員中より理事二十一名を囑託し前年度に於て計畫したる方針に基き、會員募集に着手する事に決し、偏に御願ひ申し上げますと題する、共濟會事業の趣旨を簡略に述べ、各方面委員理事が署名したる入會勸誘の印刷物及會則を、募集數日前に、各戸もれなく配付し、當日委員は區長、社宅世話役等有力家の案内により、青年團青年會七年會員等應援の下に、僅々半日位にて其方面の會員募集を修了するの方針を取り、一月二十五日宮澤、二月二十二日御殿、三月五日金坂、同十五日高坂五月二十二日御臺境小島御厩、六月一日綴坑、七月五日内町上下綴、十二月六日白水、十二月十五日宮と云ふ順序で、會員募集を決行したるに、會員三千六百二十名、會費白米三十四石七斗七升、金三百三十五圓五十八錢といふ好結果を得たのである。之に出動した氏名寫眞は其都度本紙上に發表したのであるが、其寫眞は之を茲に再掲して、特に之等諸氏の功勞を感謝する而して白米は賣却換金し其收支は左の通りである。

收入

寄附金	六一、〇〇円
會費	九五七、七四
計	一〇一八、七四

支出

生活費補助	八五、七九
救療費	一一五、三二
埋葬費	二三、〇〇
學費	一、五〇
白米給與	六二、一四

（十二月六日）

白水方面

昭和三年以來の收支決算

收入　一一〇三、七四
支出　六五三、七九
差引殘金　四四九、九五

以上の通りであつて、結局四百四十九圓九十五錢の繰越金を見た次第である

而して本年内に取扱ひたる件數を統計する時間の餘裕なきを以て之を略するが其量に於ては以上決算の示す處によつて、之を證する事を得べく、特によろこばしかつた事は、十二月十五日より全村に涉つて、委員及理事諸氏が、隈なく困窮者を調査し、幹部にて詮考の上、五十九世帶、二百三十五人の家族に對し、二十六日一齊に、右委員の手に年末餅米給與

備品費	六五、五〇
消耗費	二二、五八
印刷費	二、七四
旅費	一〇二、二七
會員標札費	二三、四一
寫眞費	一七、七七
雜費	二三、〇〇
	一、五〇
計	五四六、五二

對し、助成會即ち共濟會規定の原案を示し、一戸一ヶ年白米一升以上を會費とし

（以下欄外へつづく）

一日村會議事堂に於て、照沼縣社會事業主事補臨席の下に、其發會式を擧行し、茲に全く本村社會事業の陣

（以下六面へつづく）

たるに、氏亦之に共鳴、野木村長も亦贊同したるを以て、それには社會社業の性質を一般に知らするに如か

本年度に於ては、更に收入なく、繰越金より支出したるものは、生活補助七圓六十錢、救療費十一圓、旅費三十三圓二十錢、旅費一圓五十錢、學費二圓一錢、同より二十圓の寄附があり生活補助一圓五十錢、救療

（十二月十五日）

宮方面

會員並に役員各位の御陰により以上の成績を得た事を深く感謝いたします。尚本年に於て靜養舍建設の計畫も立てゝ居ますので倍蔭の御聲援あらん事をお願いたします。

會長　野木龜之助
副會長　菅波忠治
副會長　大内民惠

勞資の楔子　名譽の社宅世話役

新任式と披露宴

全山四千の從業員中より選任されて、勞資の楔子となり、農村の區長の如き任務にあたる昭和七年度の社宅世話役は、十二月一日を以てそれ〴〵任命されたが其新任式並に披露宴は、本日の賀辰をトし、集會所に擧行せらるゝ事となつた。其氏名は左の通りである。

▲峯根（區順）
渡邊庄作　水田作治　白田義之
木村清太郎　柿崎榮　鹽田月丸
佐川千秋　伊藤銀次郎　爪田德雄
鈴木龍太郎　市川米治　遠藤榮吉

▲平太郎
曾根榮吉　半澤貞治　遠藤鐵　鈴木春義　辻藤吉　小川松太郎

▲町田
佐藤七太郎　照井甚助　新妻富七
澤田强　若松利雄　高久市太郎
箭田初穂　志賀良平　高萩源吾
菊地吉藏

▲宮澤
根本兼次　佐保久太郎　菅野正春
南條義三　佐藤宗吉　山野邊秀吉
鈴木岸之助　熊田壽助　工藤万之助　澄川彌一　半澤廣治　菅野兵三

▲御殿
仁田宇門　桝田憲太郎　濱田末治
舞木平助　我妻芳三　渡邊音松
大谷義明　岡村常七　菊地八郎
吉田製菱一　橋本定壽　橋本庄一郎　島田春吉

▲綴
安齋松彌　木田美文　鈴木喬元
大河原龜四郎　本田新次　飯塚惣兵衛　百足利兵衛　小林健高　大村新五郎

▲平發電所
富田誠

新年祝賀式

役場に於ては、早朝全職員參集祝賀式を擧行手分けして村内各學校の四方拜式に參列する由。各校の擧式は例年の通りである

磐村

炭に於ては、午前八時より内郷山神社綴山神社、同九時より高坂山神社平山神社にて元旦祭擧行。同十時よりは礦業所に於て名刺交換會を行ひ、同十一時より集會所に於て祝賀式擧行。御殿宮澤兩親和會は同八時より高坂山神社境内に於て祝賀式擧行の由。

出縣運動

野木村長、大越治七樫村好度四家又一菅波忠治の五氏は舊臘十一日より三日間磐炭の應援を得て、村内を貫流する河川の改修費の縣費支辯阿彌陀堂道路及箕輪に通ずる村道の縣道編入等の運動の爲出縣、縣當局並縣會に陳情して其諒解を得た。

小波先生の大講演會

十二月二十二日昭和館に於て、勞務課主催兒童教育會後援の下に巖谷小波先生の大講演會が開かれ、川崎小鳥氏の滿洲土産談の前座に次いで、濱崎課長紹介で登壇叱られ物語の題で頗る面白くしかも有益なるお話があつた。滿員の大入で、講演後先生には淺野翁紀念館の爲に、地利人和及努力の名筆を揮はれ紀念撮影をして歸京せられた。因に揮毫希望者殺到し本村丈にても四十余名に達したる由。

磐炭の監査

磐炭の監査役小坂渡邊の兩氏は十二月十九日渡邊專務出口參事補と共に來山し全山の經營狀態を監査した

内郷村教育會

本村教育の統一並に研究を計る目的を以て、校長會研究會互助會等の組織を立て、全村五校の全職員打つて一團となつて、斯道の刷新向上を期する由。事務所は尋常高等校に置き、會長一名理事四名が其中心となつて活動する由。其氏名は聞きもらしたるを以て、次號に發表する。

教育訓練要項

本村各學校に於ては、時局に鑑み、兒童生徒の教育訓練に一段の努力を要するものとし、十五項の要項を擧げ、各保護者に配付し、適當と認むる一項の撰擇を希望し、其を綜合して教育方針上の參考とする由。就いて見るに各項何れも適切なるも、之が徹底實行はなか〳〵容易の事ではあるまいと思はれる。

全山未曾有の鑿岩競技大會

鶴田顧問以下係員一同の努力の結果、高坂坑機械採炭の準備全く完成したるを以て、明二日午前九時を期して高坂坑外に於て、全山六坑より各代表選手を出して、鑿岩競技大會を開催する由。實際未曾有の催ふしなるを以て、全山の血を湧して居る。而して優勝者には特に鶴田賞の寄贈ある由榮冠果して誰の頭上に歸するか。炭礦にふさはしき計劃であると思はれる。

壹錢献金

昭和六年九月十八日に突發したる滿洲事變を紀念し一錢は一戰に通ずる意味から本村各學校生徒職員一同が向ふ十ヶ年間毎年九月十八日を期し、一人一錢づつを醵出し、一朝國家有事の場合に國防費として献金する計劃を立て、それ〴〵方法規定を設けて發表し、六年度は特に二錢を納め、一錢は國防費に、一錢は貯企する事にしたる由。全國に其例を見ざる好計劃であると思ふ。

臨時村會

を舊臘二十一日開會、昭和六年小作米價格決定の件及大字宮字峯根村有林立木賣却の件を協議決定す。因に村議加美山武夫氏は平發電所へ轉勤移住に付、同二十六日辭表を提出した。

兒童教育

後援會宮支部にては、貧困兒童三十五名に對して一名略二十錢に相當する學用品全校兒童に對しては鉛筆を寄贈し、且つ全校女兒の爲には虱取藥を配給して其全滅を計りたる由。又高坂支部にては、尋常科全兒童に對して、御年玉として學用品を給與し、且六年度の收支決算（收入貳百貳拾壹圓五拾錢、支出百貳拾七圓九拾四錢、差引殘九拾參圓五拾六錢）六年度の事業概況七年度の計劃等を印刷に附してそれ〴〵本日を期して會員に配付した。

矢野恒太序　大内民惠著
服部宇之吉
教育制度改革概論
（四六版二一一頁　定價五十錢　郵稅六錢）
行き詰れる現代の教育制度を解體して、學理と實際と、歴史と實驗とから新に大内案九主義を提唱する本書は知名の士の贊同枚擧に遑あらず。されど未だ一人の抗議者も現はれず。

我國教育學界の權威
京大教授小西重直博士
書を寄せて曰く　貴兄ノ御體驗ト質地ノ御試練ニ基ク眞摯愛國ノ大精神ヲ拜味仕リ不思感激ニ打タレ申候云々。

發行所　日本評論社　東京九ノ内昭和ビル
取次所　内郷村報社

共濟會の餅米配給

既報の通り、内郷村共濟會にては、理事、委員總動員

金貳圓　浦勝彌　松沼六郎　正木千代藏
金拾圓　增澤武　松崎ハル子　藤田誠　國分周三郎　新谷彦資　小谷畑仁左工門　會川多三郎　阿部岩次郎
金五圓　安藤タカ子　佐藤　松　佐川コノ
金參拾圓　内郷　某氏
朝鮮　中野新平
田村　大方遠也

スに於て茶話會を催す。各自、過ぎにし一ヶ年の足跡を顧みて、無量の感慨一瞬……獨得の講評、例の隱藝に花を咲かし午後五時有意義に閉會　（千葉生）

決めた覺悟は變へぬ事

渡部孝一

親友在樺太大榮炭礦所長渡部孝一君の息、在台灣官營鐵道勤務武雄君と、磐炭綴坑勸務渡邊幾一氏の長女はつよ嬢との結婚は十二月十五日内郷館に於て、大内式によつて擧行せられ、記者夫妻は親代り兼仲人役をつとめさせられた。此一章は當日記者が代讀したお父君の訓辭である

渡部家結婚紀念

交はした譯である。此約束は御互に寸時も忘却する事なく、如何なる困苦にも堪へ忍んでこそ成果見るべきである。若い二人の者が、今後に出會ふ處の種々なる難儀はお前達には相像もつかぬ程の苦しい事の數々であると思ふ。之に打克つ丈の

信念は、今日只今深く腦裡に刻みつけて置かれば、他日必ず後悔失望といふ事になるは、今から明かに判つて居る。如何なる人の經驗にも必ず後悔と失望とは存在するが、其量と度數の多い少ないに依つて、其人の運不運が決まるものである。高遠の理想とか、人生の哲學とか、むつかしい事は別にして、先づ明日からの人生の門出に於て

確乎たる覺悟を抱いて置く事を熟望するものである。決心々々と幾度も決心を小出しにする如き一時的のものでは、何の役にも立たぬといふ事を、解り切つた事だが、よく誰もが忘れ勝ちのものであるから、必ず〳〵本日の誓を日夜忘却せぬ事を、父から改めて皆様の前で頼んで置く。旨ひ聞かせたい事は澤山あるが、百方言の説法も忠告も、聞えて頭に入れて置くべき事は、一言にして盡きると思ふ。曰く

決めた覺悟は變へぬ事。即ち只此丈で充分である。只今大内先生の口から、父の言葉を聞いてどう感するか。二人は共々に胸中に堅き決心がついた事と思ふ。其決心を如何なる場合にも變へぬ事に頼むで置く。

父母が極北の寒い樺太に、元氣を出して働いて居るのも、お前達が常夏の南の新日本に活動するのも、皆己れの爲めであり、一家の爲である。延いては社會國家の爲である。父、母の前途は短いが、お前達の將來は、重荷を負ふて行く遠い道である。幾多の苦しみを切り抜けてこそ、樂しみを見る事となるのであるから、大なる決心と覺悟とを必要とする。二人は父母に誓ひ、

祖先の靈に誓ひ、親戚先輩に誓つて、花々しく社會への一歩を確と踏め、今日の祝儀を遠か極北の雪と氷の樺太の山の中で、父母は心から二人の爲に、祝杯を擧げ、亡くなられたお姥さん始め、祖先の靈に報告申上げる。時折に觸れて熟讀反省を望む。

零下二十度の樺太にて　父、母。

内郷村報の六大使命

一、政黨政派を超越して、村力充實主義を標榜す。

二、村内各種機關の活動狀況を報導し併せて其協調を計り、總親和總努力の實現を期す。

三、本村共濟事業の徹底を期す。

四、村内の善事美行を表彰し、且之を奬勵す。

五、本村と本村出身者及本村關係者との聯絡を計り、且其發展向上を期す。

六、餘力を以て、國民善導に當る。

磐炭では既報の通り、全山の從業員諸氏が自發的醵金の美擧に出たのであつたが總金額實に貳百九拾五圓七拾九錢人員四千五百七十三人に達し、内五拾五圓は會社關係出征軍人家族たる岡本常七中塚源八　猪狩昇　井砂興平　山野湧秀吉　志賀直治　大竹賢三小松谷市四郎　畠山正三　笠原新作　笹山進の十一氏に對して贈呈會社からも之に金一封を添へ、濱崎課長親しく之を携へて慰問し、差引貳百四拾圓七十九錢は、村報社扱で、出征軍人慰問として恤兵部に發送した。茲に特筆すべきは澤親和會で、別に家族慰問金募集を企て、二百六十四名で金貳拾壹圓四錢を集め、右慰問金中に加へた。

慰問は軍隊に家族に

御殿山商業組合では、會長古内源喜副會長遠藤米吉　幹事平山直藏飯島千代吉山本鐵太郎飯田精一荒正直春日菊之助市川繁合津作　笹山進の十一氏に對して贈呈會社からも之に金一封を添へ、濱崎課長親しく之を携へて慰問し、差引貳百四拾圓七十九錢は、村報社扱で、出征軍人慰問として恤兵部に發送した。茲に特筆すべきは澤親和會で、別に家族慰問金募集を企て、二百六十四名で金貳拾壹圓四錢を集め、右慰問金中に加へた。

宮殿山商業組合では、會長古内源喜副會長遠藤米吉　幹事平山直藏飯島千代吉山本鐵太郎飯田精一荒正直春日菊之助市川繁合津作　笹山進の十一氏に對して贈呈會社からも之に金一封を添へ、濱崎課長親しく之を携へて慰問し、差引貳百四拾圓七十九錢は、村報社扱で、出征軍人慰問として恤兵部に發送した。茲に特筆すべきは澤親和會で、別に家族慰問金募集を企て、二百六十四名で金貳拾壹圓四錢を集め、右慰問金中に加へた。

名殿山商業組合では、會長古内源喜副會長遠藤米吉　幹事平山直藏飯島千代吉山本鐵太郎飯田精一荒正直春日菊之助市川繁合津作　笹山進の十一氏に對して贈呈會社からも之に金一封を添へ、濱崎課長親しく之を携へて慰問し、差引貳百四拾圓七十九錢は、村報社扱で、出征軍人慰問として恤兵部に發送した。茲に特筆すべきは澤親和會で、別に家族慰問金募集を企て、二百六十四名で金貳拾壹圓四錢を集め、右慰問金中に加へた。

高殿山商業組合では、會長古内源喜副會長遠藤米吉　幹事平山直藏飯島千代吉山本鐵太郎飯田精一荒正直春日菊之助市川繁合津作　笹山進の十一氏に對して贈呈會社からも之に金一封を添へ、濱崎課長親しく之を携へて慰問し、差引貳百四拾圓七十九錢は、村報社扱で、出征軍人慰問として恤兵部に發送した。茲に特筆すべきは澤親和會で、別に家族慰問金募集を企て、二百六十四名で金貳拾壹圓四錢を集め、右慰問金中に加へた。

宮殿山商業組合では、會長古内源喜副會長遠藤米吉　幹事平山直藏飯島千代吉山本鐵太郎飯田精一荒正直春日菊之助市川繁合津作　笹山進の十一氏に對して贈呈會社からも之に金一封を添へ、濱崎課長親しく之を携へて慰問し、差引貳百四拾圓七十九錢は、村報社扱で、出征軍人慰問として恤兵部に發送した。茲に特筆すべきは澤親和會で、別に家族慰問金募集を企て、二百六十四名で金貳拾壹圓四錢を集め、右慰問金中に加へた。

代殿山商業組合では、會長古内源喜副會長遠藤米吉　幹事平山直藏飯島千代吉山本鐵太郎飯田精一荒正直春日菊之助市川繁合津作　笹山進の十一氏に對して贈呈會社からも之に金一封を添へ、濱崎課長親しく之を携へて慰問し、差引貳百四拾圓七十九錢は、村報社扱で、出征軍人慰問として恤兵部に發送した。茲に特筆すべきは澤親和會で、別に家族慰問金募集を企て、二百六十四名で金貳拾壹圓四錢を集め、右慰問金中に加へた。

山野邊正直君奮戰負傷の實況

歩兵二十九聯隊一中隊長　宮崎忠雄

（前略）開戰後約一時間も經過せしと思はれ候頃不幸敵彈は山野邊君の右前胸部を貫通候致然るに勇敢なる正直君には雨と降り來る彈丸下に在りて「小隊長殿繃帶さへ施せばまだ〳〵戰鬪が出來ます」といふ是には小隊長も君の勇敢に感激せられ思はず涙を催したる由に御座候尚敢客せらるゝに及んでも亦自己の所持せる彈丸を一々戰友に手渡され又云ふには「君分隊長殿と最後迄戰鬪し得ないのが何より殘念だ何卒分隊長殿に宜しく申して吳れ」と沈着にして尚も戰鬪を繼續せんとする意氣實に稀に見る勇士に御座候云々（後略）

右は殿父山野邊秀吉氏に寄せられたるの一節である　記者

俳句

麥笛吟社

寒月や大地にしかと木々の影　江連半仙

もの影の鋭ざかりける寒の月　目黒星甫

黍殼もいさゝか積みて年木かな　南波白眠

頭たけ見えて居るなり年木積み　高萩六王

年木燒とつと、坂を下りけり　石田ゆたか

一ト棚を殘して年木賣りにけり　岡本不昧男

寒月やてら〳〵と椿の葉　皆川二樓

御挨拶

伴等出征の故を以て我々家族に對し會社並從業員各位より鄭重なる御慰問を忝うし感佩に堪へず茲に厚く御禮を申上げます

一月一日　拜具

井砂興平
志賀直治
山野邊秀吉

本紙發行は大内一家の事業にして、其の社說は子孫に對する遺言を兼ぬるものなり。

ふで一種のロボットたらざるを得ないのである。殊に馬鹿々々しい目にあつて居るのは、忠良なる臣民、善